

リビング・ヘリテージの 国際協力

文化遺産国際協力コンソーシアム 第2回研究会



研究会資料

講演者等紹介

講演概要

展示パネル一覧



Japan Consortium
for International Cooperation
in Cultural Heritage

目次

- はじめに
- プログラム
- 講演者等紹介

◇司会

清水真一：東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター長

◇講演者

リチャード・エンゲルハルト：ユネスコ バンコク事務所 アジア太平洋地域文化担当アドバイザー

友田博通：昭和女子大学国際文化研究所教授

-菊池誠一：昭和女子大学国際文化研究所教授

-マーク・チャン：昭和女子大学国際文化研究所講師

-高尾哲也：昭和女子大学生生活科学科教授

-谷井淑子：昭和女子大学生生活環境学科教授

三浦恵子：早稲田大学文学学術院非常勤講師

◇パネリスト

三宅理一：慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授

福川裕一：千葉大学工学部教授

◇モデレーター

稲葉信子：東京文化財研究所文化遺産国際協力センター 国際企画情報研究室長

■ 講演概要

◇「国際協力の世界的動向、日本に求められているもの」リチャード・エンゲルハルト

◇「ベトナム・古い町ホイアンと古い村ドンラムー文化遺産国際協力への学際的取り組みー」

友田博通

-「ホイアンにおける考古学的調査と国際協力」 菊池誠一

-「ベトナムの古文書を読む」 マーク・チャン

-「食の保存・復元・再生」 高尾哲也

-「ドンラム村の伝統衣服」 谷井淑子

◇「東南アジアのリビング・ヘリテージとこれからの国際協力のあり方」 三浦恵子

■ 展示パネル一覧

■ はじめに

近年、文化遺産保護国際協力の現場では、遺産の保全のためには遺産を支える地域社会の持続的発展が必要不可欠だという認識が高まっており、遺産を持続的に保全できるような地域社会の仕組み作りや、遺産に関連する有形・無形の様々な地域文化の保全・活用など、その地に生きる地域社会を視野に入れた文化遺産国際協力が求められるようになってきました。とりわけ、遺産そのものが現在も地域社会の生活の場となっているようなリビング・ヘリテージでは、このような視点での総合的な国際協力が欠かせません。

日本の行っている文化遺産国際協力では、このようなリビング・ヘリテージへの国際協力事例は少なく、しかも小規模なものにとどまっています。しかしながら、文化遺産国際協力を取り巻く近年の状況を考えると、リビング・ヘリテージへの国際協力は、今後重要な協力分野の一つになると考えられます。

そこで、本研究会では、日本のリビング・ヘリテージ国際協力の現状とあり方について、まず諸外国ではどのような文化遺産国際協力が行われているのか、また日本の国際協力ではどのような事例や案件があるのか、そして、今後国際協力事業として実現していくためにはどのような課題があるか、という点に着目しながら参加者全員で検討を進めていきます。

■ プログラム

- 13:30-13:45 **あいさつ**
文化遺産国際協力コンソーシアム事務局 清水真一
- 13:45-14:30 **基調講演 “ 国際協力の世界的動向、日本に求められているもの ”**
リチャード・エンゲルハルト ※逐次通訳付
- 14:30-15:10 **事例報告 “ベトナム・古い町ホイアンと古い村ドンラム”**
「文化遺産国際協力への学際的取り組み」 友田博通
「考古学と国際協力の在り方」 菊池誠一
「ベトナムの古文書を読む」 マーク・チャン
「伝統食品を現代にどう生かすか」 高尾哲也
「伝統衣装の合理性と装飾性」 谷井淑子
- 15:10-15:50 **事例報告 “東南アジアのリビング・ヘリテージとこれからの国際協力のあり方”**
三浦恵子
- 15:50-16:30 **コーヒー・ブレイク**
- 16:30-17:30 **パネルディスカッション “Living Heritage の国際協力を推進するために”**
パネリスト: リチャード・エンゲルハルト
友田博通
三浦恵子
福川裕一
三宅理一
モデレーター: 稲葉信子
- 17:30-19:00 **懇親会**

■講演者等紹介

◇司会者



清水 真一

東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター長

1951 長野県生まれ。東京都立大学大学院修士課程修了。専攻は日本建築史、文化財保存学。工学博士。文化庁文化財保護部建造物課主任文化財調査官、奈良文化財研究所文化遺産部建造物研究室長、東京芸術大学大学院(文化財保存学専攻)教授を経て、2007 年4月より東京文化財研究所文化遺産国際協力センター長(現職)。『木造建造物の保存修復のあり方と手法』(奈良文化財研究所)、「文化財修復総説」(歴史と地理 605 号日本史の研究 217)など。

◇講演者



RICHARD A. ENGELHARDT

ユネスコ バンコク事務所 アジア太平洋地域文化担当アドバイザー

イエール大学とハーバード大学にて人類学と考古学を専攻。30 年間にわたり、アジア太平洋地域の文化遺産保存の現場をリードしている。1986～1989 年にフィリピン UNHCR (United Nations High Commissioner for Refugees)の現地担当官、1989～1991 年にユネスコ技術アドバイザー責任者、ASEAN 諸国の国立博物館の近代化プロジェクト等を歴任。1991～1994 年にはカンボジア ユネスコ事務局長に就任し、アンコールの国際保護キャンペーンを立ち上げた。現在はアジア・太平洋地域の文化のユネスコ地域アドバイザーで、46 カ国の文化部門計画を主導する。最近では日本の早稲田大学その他、中国やパキスタンの大学で講演も行っている。著書は *Two Thousand Years of Engineering Genius on the Angkor Plain (University of Pennsylvania Press)*, *Technology in the Service of Archaeology in the Plain of Jars (UNESCO)*, *Lessons Learned from the UNESCO Asia-Pacific Heritage Conservation Awards 2000-2004, (UNESCO)* など。

友田 博通

昭和女子大学国際文化研究所教授



1949年東京都港区六本木生まれ、東京大学大学院(建築学)修了・工学博士。岡田新一設計事務所に勤務し警視庁本部庁舎他の設計に参加。その後、昭和女子大学に勤務し現在に至る。住宅研究者として著書に「心の住む家―家とインテリアの心理学―」理工図書、「ベトナム町並み観光ガイド」岩波アクティブ新書他、建築設計者として作品に、「伊東T氏邸」「藤沢T邸」他がある。1992年から文化庁の指導のもとベトナム政府に協力する形で「ホイアンの町並み保存」、JICA開発パートナー事業「木造民家文化財保存技術向上計画」、「ドンラム村農村集落保存」に参加、その成果により、ベトナム文化功労賞・ユネスコアジアパシフィック文化財保存賞・日本建築学会賞などを受賞。

菊池 誠一

昭和女子大学歴史文化学科教授



1954年12月、群馬県生まれ学習院大学大学院修士課程修了。1992～95年までベトナム・ハノイ総合大学留学。1999年、国際協力事業団(JICA)派遣専門家として、ベトナム・ホイアン駐在。宇都宮大学非常勤講師、昭和女子大学専任講師・助教授を経て、大学院生活機構研究科・人間文化学部歴史文化学科教授。博士(学術)専門は、東南アジア考古学、とくにベトナム歴史考古学。主な著書に『ベトナム日本町の考古学』(高志書院、2003年)、『近世日越交流史―日本町・陶磁器』(共編著、柏書房、2002年)、『ベトナム考古文化』(翻訳、六興出版、1991年)などがある。

マーク チャン

昭和女子大学歴史文化学科講師



1964年台湾生まれ。ニュージーランドのオークランド国立大学卒業(商学士、文学士)後、国費留学生として広島大学大学院で経済学修士号を取得。1993年以来、昭和女子大学国際文化研究所の一員としてベトナム文化財保存協力事業に従事。現在までに携わった事業として、ホイアン町並み保存調査、ホイアン歴史的民家修復、ベトナム全国伝統民家悉皆調査、JICA開発パートナー事業、ドンラム村農村集落保存事業などが挙げられる。調査研究面では、ホイアン古文書の収集・分析を担当。主な著書に*Hoi An*(共著)、*Vietnamese Traditional Folk Houses*(共著)、『国際文化研究所叢書—會安町家文書』(編著)、*Distortion in the Study of Japanese Modern and Contemporary Economic History*(訳書)などがある。

高尾 哲也

昭和女子大学生活科学科准教授



東京農業大学大学院農学研究科修了、農学博士。大日本明治製糖株式会社研究開発センターを経て、2001年より昭和女子大学勤務。現在の研究テーマは主に、ヒト口腔内に存在する味覚受容体の発現性と年齢や地域との相関性や、擬穀(雑穀)類のコレステロール低下作用や抗アレルギー作用の解明と食品への応用など。東南アジアの国々には多種にのぼる食品素材が存在している。これらの食品素材の機能の解明や安全性の検討、歴史的背景の探索は、今後の食研究ばかりでなく、地域経済の活性化にも繋がり、発展が期待される非常に興味深い分野である。

谷井 淑子

昭和女子大学生活環境学科教授



1952年石川県能登生まれ。昭和女子大学大学院家政学研究科修士課程修了。専門分野は服飾文化、服飾造形。主な論文・著作は「アイヌ衣服の復元的調査研究」(共著)、「アイヌ民族服飾の復元・保存及び文化に関する研究」(共著)、「唐招提寺所蔵 国宝『方円彩糸花網』の実態解明—編組織と技法的特質—」(共著)、「世界の民族衣装の事典」(共著)、衣生活論(共著)、造形活動については二人展「花のころ」、二人展「造形プロセスに美の原理を求めて」など。

三浦 恵子

早稲田大学文学学術院非常勤講師



1991年英国ハル大学にて地域学(東南アジア)で学士号取得。1992年、ロンドン大学(SOAS: 東洋アフリカ研究所)にて地域学(東南アジア)の修士号取得。1992年から1998年までユネスコ・カンボジア事務所文化部で無形・有形文化財関係プログラムを担当。その間、6ヵ月ほど日本国政府アンコール遺跡救済チーム(JSA)で文化人類学調査と発掘調査や遺物の記録や整理を担当。その後、ロンドン大学SOASに戻り、アンコール遺産と地域住民の関係について研究(1998~2003)し、社会人類学で、2004年に博士号取得。2004年より現在まで、早稲田大学にて非常勤講師として、「東南アジアの民俗学」、「東南アジアの文化と社会」、「文化と観光」などを教えている。著書に、「保存中心主義から遺産を活かす方向へ—アンコール世界遺産地域におけるプロセス—」『文化人類学研究』第7巻、早稲田大学文化人類学会、「アンコールにおける観光開発の歩み」海老澤衷編『ジャポニカの起源と伝播。伊予国弓削島荘の調査』講座水稻文化研究III。早稲田大学、水稻文化研究所、「ヘリテージツーリズムの光と影—世界遺産アンコールをめぐる—」山下晋司編『観光文化学』新曜社などがある。

◇パネリスト

三宅 理一

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授



慶應義塾大学大学院教授。専門は建築史、地域計画、デザイン理論。東京大学工学部建築学科卒業(1972)、同大学院を経て、フランス政府留学生として渡仏、パリ・ソルボンヌ大学博士課程予科修了、エコール・デ・ボザール卒業、東京大学より工学博士、芝浦工業大学工学部、リエージュ大学(ベルギー)客員教授を経て1999年より慶應義塾大学大学院政策メディア研究科教授、パリ国立工芸院客員教授。1992年、1991年デザイン大賞(Grand Prix of Design 1991)受賞。2004年、中国瀋陽市より瀋陽市世界遺産化の業績に対して瀋陽市榮譽市民を、2006年には、フランス政府より日仏学術交流の業績に対して学術教育功勞勲章(Officier des Palmes academiques)を授与される。幅広い地域で文化遺産国際協力活動に従事しており、近年のプロジェクトとしては、ルーマニア・プロボタ修道院保存修復事業(1993年～2000年)、ジブチ教育省学校建設プロジェクト(1999年～2002年)、ルーマニア・バリネシュティ聖堂保存修復事業(2001年～)、ロシア・スピヤスク島都市再生事業(2002年～)などがある。

福川 裕一

千葉大学工学部教授



1950年千葉県生まれ。千葉大学大学院工学研究科・建築都市科学専攻教授。専門は都市計画・アーバンデザイン。歴史的環境の保全、既成市街地再生をテーマに、川越、佐原、長浜、小諸、高松市丸亀町などのまちづくりにかかわってきた。1992年からはベトナムの町並み保存プロジェクトにも取り組む。川越一番街町並み委員会・委員、NPO 全国町並み保存連盟副代表、NPO 千葉まちづくりサポートセンター(ボーンセンター)代表。主な著書に、都市にとって土地とは何か(共著・筑摩書房、1988)、未完の東京計画(共著・筑摩書房、1992)、ゾーニングとマスタープラン(学芸出版、1997)、ぼくたちのまちづくり(全4冊、岩波書店、1999)、持続可能な都市(共著・岩波書店、2005)、中心市街地活性化とまちづくり会社(編著・丸善、2005)など。建築作品に「木曾暮らしの工芸館」、「高松市丸亀町A街区再開発」。1995年に「都市住宅に対する都市計画的アプローチとは何か」で都市住宅学会賞、2000年に「ベトナム・ホイアン町並み保存プロジェクト」で建築学会賞、『ぼくたちのまちづくり』で都市計画学会石川賞。

◇モデレーター

稲葉 信子

東京文化財研究所文化遺産国際協力センター国際企画情報研究室長



専門は文化遺産論及び建築史。工学博士。文化庁及び国際機関イクロム(文化財保存修復研究国際センター、在ローマ)を経て2002年から現職。文化遺産の理念から政策まで広く各国及び国際機関の動向について比較研究を行う傍ら、インド、ベトナムなどアジアを中心に具体的な文化遺産国際協力事業に携わっている。日本ユネスコ国内委員会委員。イコモス会員。

■講演概要

“ Safeguarding Cultural Diversity: Empowering Culture Bearers and Mobilizing Civil Society ”

UNESCO バンコク事務所

RICHARD A ENGELHARDT

This presentation will highlight UNESCO's efforts in safeguarding Asia's intangible and tangible cultural heritage, in the context of the ongoing paradigm shift from a top-down to a more bottom-up conservation approach, underscoring the crucial role of the members of the civil society as essential actors and participants in the preservation of their local traditions and heritage.

Dr. Engelhardt will present the various initiatives developed by UNESCO Bangkok's Culture Unit towards the empowerment of local stakeholders, traditional heritage caretakers, heritage homeowners, heritage professionals, and youth and how their joint efforts for the preservation of local cultural assets is critical to the protection and promotion of cultural diversity in Asia and the Pacific.

文化遺産保全に対する手法がトップダウンからボトムアップ方式へと大きく転換している流れの中において、地域社会の人々が文化遺産や自らの伝統を保護する上で必要不可欠な存在であり、かつ重要な役割を果たしているという点を考慮に入れながら、ユネスコが行っているアジアの無形・有形文化遺産を守る取り組みを紹介する。

今回は、文化遺産をとりまく地域の利害関係者、伝統的遺産の管理者、所有者、専門家、若者といった人々をエンパワーメントするためにユネスコバンコク事務所文化部が展開している、様々な initiatives（先進的取り組み）を紹介する。これらの事例を通じて、地域の様々な立場の人が協働して地域の文化資産の保全に取り組むことが、いかにアジア太平洋地域の文化の多様性の保護や活用にとって重要であるかを伝える。

“ ベトナム 古い町ホイアンと古い村ドンラム ”

－ 文化遺産国際協力への学際的取り組み －

昭和女子大学国際文化研究所

友田博通

1. 学際的取り組みの概要

1) 昭和女子大学国際文化研究所の沿革

昭和女子大学は、1992年文化庁文化財部建造物課よりご依頼があり、国際文化研究所を設立、事務局として他の多くの大学・研究機関・建築技術者とともに、「ホイアンの町並み保存プロジェクト」に参加いたしました。この後、2003年「ホイアン宣言」でアジアの木造建築群を守るための国際協力の一環として、JICA開発パートナー事業「ベトナム木造民家文化財保存技術向上計画」、「ドンラム村農村集落保存プロジェクト」「ハノイ36街区保存プロジェクト」「中国麗江プロジェクト」等々に参加させていただいてきました。

これらの活動は、当初建築を中心とした保存への国際協力でしたが、現地の方々の興味は建築＝住に限定されず、広範な生活文化＝衣食民俗に及ぶリビングヘリテージ全般に渡るものでした。そのため、昭和女子大学の様々な分野の先生方へお願いし、いくつかの学際的な試みを行ってまいりました。今回、この学際的な取り組みについて紹介する場を与えていただき感謝いたします。

2) 学際的取り組みの経緯

リビングヘリテージ保存の第一は、現存する民家・家並み・道と公共物の建築都市分野があり、民家調査が始まって、物理的な状況を徹底的に調査するとともに、居住者の方々にヒアリングし、最終的に保存計画を検討します。おもに文化財保存行政・建築保存修復技術・建築史・建築計画（友田博通）・都市計画（福川裕一）の専門家が中心となって実施してきました。

第二には、昔の状況を知るために、考古学による発掘、古文書の解読などが必要になります。ホイアンでは、当初から建築都市調査とともに菊池先生の考古学隊による発掘調査・チャン先生の土地家屋台帳の収集解読を行い、

建築都市の保存計画を考える上でも大きな成果をあげました。それぞれホイアン以降、さらにフィールドを広げ協力しあっています。今回は、菊池先生・チャン先生にこの分野のご報告をお願いしました。

第三は、民俗学や伝統衣食の研究。実はホイアンではこの分野への協力は後手々々になりました。実際に動き出したのは、ホイアンが世界遺産に登録された翌2000年に昭和女子大学で「世界遺産ホイアン展」を開催した時からです。この時は展示のために衣服、家具、陶磁器、装飾品等の研究が始まりました。次は、2003年昭和女子大学が日越国交樹立30周年記念事業「ホイアン国際フェスティバル」（以降毎年開催）を運営させていただいた時、シンポジウムの中で、食品科学分科会、被服学分科会、考古学分科会としてセッションを設けています（参照：昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol. 9 「ベトナム・ホイアンの学際的研究」）。なお、この時採択された「ホイアン宣言」は、ホイアンへの協力後、アジア各地に協力の輪を広げるきっかけになりました。

ホイアンに比較し、2003年から始まる「ドンラム村農村集落保存プロジェクト」では、建築（担当：島田敏男）とともに、民俗学（担当：小川有子）が先行しました。小川さんは半年に渡り現地の家に居住させていただき住民の生活・民俗を調査しています。また、考古学・文献収集は2年目から、衣服食物は3年目からハノイ国家大学と共同研究をスタートさせました（参照：Ancient Village DUONG LAM）。今回はこの活動を、衣服・谷井先生、食物・高尾先生にご発表いただきます。さらに昨年3月に、エンゲルハルト氏を初めとするユネスコ・イコモスの方々に現地を視察いただいた折に、その成果の一端として、ベトナム側が衣服の展示、食物はミア寺の精進料理という形で披露しました。その様子は、今回ポ



世界遺産ホイアン展（2000）



第1回ホイアン国際フェスティバル展（2003）

スター展示で発表（衣服：下村久美子・食物：向後ちさと）
させていただいています。

3) 学際的取り組みの今後

伝統衣服・伝統食品等の保存・復原・再生の研究は、
集落保存がある程度進むと観光的には重要な分野となり、
地場産業を育て観光収入に直結し地域経済を発展させます。
そういう意味で、経済協力という側面が明確で
ご理解いただきやすい面があります。伝統的な町並みや
伝統的集落がまず観光資源として存在し守られた上で、
そのポテンシャルを利用すれば地場産業育成はさらに有効
になると考えられます。

ホイアンは、1997年から観光資源を守るという立場
でJICA 専門家（篠崎正彦・菊池誠一・南雲一郎）を、
1999年12月の「世界遺産」登録をはさみ2003年の「ホ
イアン国際フェスティバル」まで派遣していただきました。
2003年12月からは海外青年協力隊となり、2008
年1月から石崎絵里さんが建築隊員として継続赴任しま
す。また、新たにドンラム村も、観光資源を守るという
立場で建築隊員として宇都光恵さんが、4月からは伝統
衣食等の地場産業育成を含む観光支援という立場で小貫
さんが村落隊員として赴任することになりました。今後
さらに、様々な分野で協力が進展することを期待します。

2. ドンラム村保存の建築分野の国際協力

1) 保存条例・保存計画への協力

ドンラム村は、2003年3月文化庁文化財部（刈谷勇
雅・坊城俊成他）とベトナム文化情報省との協定締結後
に調査を開始し、2005年11月農村集落として初めて
文化財として国指定され、2006年5月に保存条例が発
布、7月に遺跡管理事務所がスタートしました。最終的

にベトナム側が策定した保存条例はたいへん厳格で、「保
存地区 I では家屋は平屋建てとし現有の平面構造、敷地
全体をできるだけ保存する。」などの規定があります（参
照：Ancient Village DUONG LAM）。

さらに現在、保存を実施するための長期的予算請求の
ための保存計画が、ベトナム文化情報省文化財修復設計
センターによって策定されている最中です。

2) 建築文化財修復技術の国際協力

現在は、建築の文化財保存修復技術への協力が最重要
な段階になりました。ドンラム村の古民家修復工事は、
ソントイ市予算で、2007年10月からNu 邸・Thu 邸・
Am 邸、2007年12月から重要物件であるモンフー集落
の門がスタート、2008年2月から、ハティ省予算で、
重要物件である民家 Hung 邸・Vinh 邸がスタートする予
定です。これらの工事には、文化庁文化財部（林良彦）
の指導の下、国際交流基金のご支援で、日本の文化財修
復技術者（鳴海祥博・江島明義・家泉博他）がボランティ
アの形ではありますが、現地に赴き常駐に近い形で技術
協力しています。2008年1月からは宇都建築隊員も常
駐し万全の体制を整えつつあります。

今回の特徴は、ホイアン等と異なり家屋修復費はベト
ナム側予算により実施していることです。実際の現場で
ベトナム側工事に技術指導を行うということは、多くの
追加工事が発生し追加予算が必要になるため、これにベ
トナム側が対応できるのか、日本からの支援も必要にな
るのかなど今後の課題となっています。さらに、関係各
方面からのご支援を賜り、ドンラム村の世界遺産登録を
可能とする水準の保存を目指して、私たち関係者一同努
力してまいりたいと思います。



Nu 邸解体工事



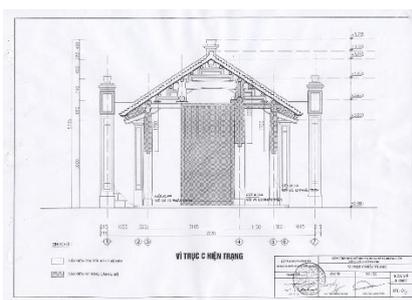
モンフー集落の門



モンフー集落最古の Hung 邸



Nu 邸古材積み指導



門の修復設計図



Hung 邸の修復設計図

ホイアンにおける考古学的調査と国際協力

昭和女子大学 菊池誠一

ベトナム中部の港町ホイアン。旧市街地には19世紀初頭頃からの木造町家群が並び、東南アジアのなかでも古い港町の景観とベトナム古都市の「市」の部分をよく残している点で、1999年にユネスコの世界遺産に登録された。この旧市街地のどこかに、江戸時代のはじめ、朱印船でホイアンに渡った日本人商人の住む日本町があった。鎖国により帰国できなかったかれらの墓は、ベトナム人の手によって守られ、今も線香の火が絶えない。

1993年から昭和女子大学を中心とした研究者グループは、ホイアンの町並み保存事業を展開している。私はハノイ国家大学と共同で、ホイアンの都市形成史と日本町の実態を解明する考古学調査をすすめてきた。2006年8月も、肌をこがすような光線と身体にまとわりつく湿気の中、旧市街地に発掘坑を入れた。それは、日本人が架けたという伝承のある通称「日本橋」のたもとと、そこから数10メートル西側のミンカイ地点などである。

ミンカイ地点では、地下2メートルで検出した17世紀後半の焼土層から、火災にあった建物の炭化物と日本の肥前磁器が大量に出土した。そして、「日本橋」のたもとでは、やはり地下2メートルから炭化した木杭やレンガの基礎遺構を検出した。

現在の「日本橋」は後世に架け替えられた橋であるが、この遺構は、『海外紀事』（1695年）に記録されている「日本橋」の基礎である可能性が極めて高い。ミンカイ地点もあわせ、ホイアンで日本町の建築遺構が確認されたのは初めてのことである。

もともと、「日本橋」のたもとは、その地点が生活道路であり、かつ観光客の訪れる名所であるため、発掘計画には組みこんでいなかった。ホイアン旧市街地は毎年のように洪水にみまわれる、危機に瀕した文化遺産でもある。洪水から町並みを守り、生活を改善するためのインフラ整備はかかせない。

地下に日本町が眠っているであろう地区でも、下水道管敷設工事がはじまっていた。危機感をつのらせたわれわれは、ベトナム文化情報省やクアンナム省文化局、ホイアン市長に対し、埋蔵文化財の保護と調査の必要性を訴えた。そして、工事が始まっていた「日本橋」のたもとを緊急調査することになったのである。

調査成果を受け、ホイアン市は工事をただちに中止した。われわれとの再協議の結果、今後は考古学調査を実施してから工事を行うこと、現地考古学専門家育成のため、ホイアン市職員がハノイ国家大学で考古学研修を受けることで合意した。専門家の不足は、ベトナムの地方自治体がかかえる深刻な問題でもあった。さらに、ミンカイ地点については、急遽ホイアン市の予算で野外博物館として保存し、市民や観光客に公開する方向性がしめされ、その技術支援を日本側に要請してきたのであった。

町並み保存と住民生活の改善、埋蔵文化財保護と専門家不足のせめぎ合いのなかで、ベトナムの文化財保護法に則った、速やかな解決がはかられたことに、ベトナムの今後の豊かな文化発展をみる思いがした。

（『読売新聞』2006年9月29日掲載）

ベトナムの古文書を読む

昭和女子大学 マーク・チャン

本報告は、昭和女子大学国際文化研究所から出版された『国際文化研究所叢書—會安町家文書』に基づくものである。

「會安町家文書」は、ベトナム・ホイアン（會安）町並み保存調査の一環で収集されたホイアン町家文書の影印に翻刻を付して、公刊紹介するものである。

ホイアンはベトナム中部に位置する歴史的商業港であり、17世紀には日本人居住区も町の中に栄えていたとされる。しかし、現在残っている町並みは、日本人町が衰退した後、主に中国人の移民によって築かれたものである。ホイアンの住民は、先祖代々から受け継いだこれ

ら土地家屋に関する文書を大切に保管している。

ホイアンの歴史的地区にある町家の内、45軒の町家から文書が収集された。これらの文書は、土地家屋売却／抵当証文、土地登記証文、土地家屋分配書、及び家譜等である。文書は年代によって中国語、フランス語、そしてベトナム語に移り変わっている。20世紀以前のものは、殆ど古い中国語で書かれている。歴史的地区内で収集された文書のうち、一番古いのは永祐5年（1739年）までさかのぼる。文書の収集方法としては、小型コピー機を持って調査対象街区の家々を回り、家主の承諾を得てから家の中で文書のコピーを行なった。当叢書で

は、収集された文書の中から比較的年代が古い文書が集まっている七軒を選び、収めることとした。

収集された文書のうち、一番多いのは土地家屋売却証文と土地家屋抵当証文である。これら証文は、古いものから次々と綴じ重ねて行くのが多い。体裁については、18世紀の古いものから比較的新しい20世紀のものまで、ある程度の一貫性がある。以下、土地家屋売却／抵当証文を部分ごとに紹介しよう。

一、証文の先頭。証文作成を依頼した当事者の本籍地及び／又は居住地と姓名が記述される。通称名がある場合は、それも記述することが多い。(図1：①参照)

二、証文の本文。ここでは概して証文の作成目的、敷地の仕切り、建物の種類と屋・間数や売却／抵当の条件等が記述される。また、添付書類がある場合は、それを文の最後に明記する。(図1：②参照)

三、証文の結び。ここでは当事者の署名(手記)、姓名・拇印(点指)または署名・拇印(記指)、証人(視誠人／証見人)の署名、証文作成者、及び証文作成日が記載される。(図1：③参照)

以上は殆どの場合、女性は署名ではなく拇印を行っていた。このことは、当時のベトナムにおける女性の無筆率が極めて高かったことを物語っている。ベトナムの場合、昔の中国と同じように、女性の名前は、姓の後に「氏」を付けるのが殆どなので、性別を見分けるのは比較的容易である。証文の証人を立てないこともあるが、殆どの場合、証人は付く。また、多くの場合、当事者が所属する社(居住区域単位の一つ)の郷長・郷老が証文

の証人となっている。

土地登記証文も数多く収集された。以下、土地登記証文を部分ごとに紹介しよう。

一、証文の先頭。登記証文当事者の本籍地と姓名が記述される。通称名がある場合は、それも記述することが多い。(図2：④参照)

二、証文の本文。ここでは概して登記される土地の寸法、敷地の仕切り、申告内容に偽りがあった場合の罰則等が記述される。(図2：⑤参照)

三、証文の結び。ここでは登記証文当事者の姓名・拇印、証文を是認する文言、証文作成者、及び証文作成日が記載される。(図2：⑥参照)

土地登記については、調査対象年代の内、泰徳及び嘉隆の年代に全国的規模で、土地登記が行なわれたと言われている。これは、時の国家行政の命令によって行なわれたもので、両王朝期とも数年間にわたって実施された。年代については、集められた土地登記証文もこれらの年代と一致する。ホイアンで集められた土地登記証文は、特に泰徳8年(1785年)と嘉隆10年(1811年)に集中している。両年代の土地登記証文の体裁は殆ど共通しているが、証文を是認する文言が泰徳8年には「付執憑 輔政」であったのに対し、嘉隆10年には「○社員職郷老郷長本社全認實記」に変わっている。

「會安町家文書」に収められている文書は、ホイアンの町並み形成や土地家屋売買・登記制度等の歴史を解明する上で貴重な史料であり、研究資料として活用されることを期待したい。

食の保存・復元・再生

昭和女子大学 高尾哲也 ・ 向後千里

集落や遺跡保存が進むと、これらの保存に関わる地域に住む人々に、建物再建不可に始まり、建物の外観や内装、利便性等の変更にも地域限定的な制約が課せられると共に、経済的な負担が発生する事となる。これらの事は集落保存を継続する上で、大きな障害となる可能性が高い。そのため、保存集落や遺跡における、観光化等による経済的な支援と自立は大きな課題となる。観光資源としての集落や遺跡の価値は高いが、観光客を長時間滞在させ、消費を促す事も重要な要素である。その様な要素の一つに、伝統食を始めとする食事の提供や食品素材、食品の販売がある。特に食事等をレストラン等で提供する事は、観光客などの外部から訪れる人々の、集落や遺跡における滞留時間の延長に効果があるばかりでなく、食事

に伴った食品・食品素材の販売にも繋がってゆく。この様な事業を行おうとする場合、現在の食事や、伝統食品、特産品の調査が不可欠となってくる。

1. 現在の食事

ドンラム村の現在の食事は、米と野菜を中心に、豚肉や魚肉を摂取する、素朴な形態を保っている。また、ポイなどのお茶類や、地鶏の飼育なども行なわれている。

2. 伝統食品

ドンラム村では、祭りの際の食事や、いくつかの醗酵食品、寺院における精進料理の存在が知られている。しかし、今回の調査では、その詳細な内容、調理方法などに

ついでに文献等を入手することはできなかった。

3. 特産品

ドンラム村ではとうもろこしや大豆を用いた味噌様調味料や、砂糖を用いた菓子類、豆腐などの製造が行われている。しかしこれらの製品群は、他の近隣地域などでも生産されている、との事であり、ドンラム村特有の食品ではない可能性が高かった。

ドンラム村の伝統衣服

昭和女子大学 谷井淑子

「ドンラム村農村集落保存プロジェクト」の生活文化調査に参加させていただき、ハノイ国家大学、ドンラム村遺跡管理事務所の皆様と共にドンラム村の伝統衣服について調査をさせていただく機会を得ることができましたので、その活動の一端を報告させていただきます。

調査ではドンラム村の伝統的な衣服の現状把握を目的として、「日常着」と「祭礼衣装」を取り上げ、資料の収集、整理を行いました。

ドンラム村の人々の衣服の現状は、男性は年齢を問わずシャツとズボンなどの洋服を着用し、女性も若・中年層は同様にブラウスやシャツにズボン、ジーンズなどの洋服を着用しています。その中であって主に70歳以上の高齢女性には、現在でもアオザイの祖型といわれる「アオ・ナム・タン」をはじめ、民族特有の伝統的な衣服が日常的に着用されていることが確認できました。また、伝統的な衣服の所在とともに、髪型や被り物なども合わせた着装法も記録にとどめることができました。しかし、高齢女性にのみ僅かに残されているこれらの伝統的な衣服は、次世代に受け継がれておらず、世代や生活様式の変化とともに伝統的な衣生活文化もまた、途絶えつつあるのが現状です。

ドンラム村の各集落には祭礼衣装が伝えられており、祭りの司祭が着用する衣装、神輿の先導をする者の衣装など数種が確認できました。祭礼衣装には、古い衣装を現

以上のように現在のドンラム村の食事、伝統食品等の状況に、経済的にも即座に利用可能な事項を見いだすことは出来なかった。しかし、ベトナムで最初に砂糖きび栽培および砂糖生産を始めた地域であるとの伝承や、ミア寺の様な歴史的な寺院の存在、調味料製造業等の存在は大きい。すなわち、これらを基礎として、安全性や衛生性、見栄えを加味した食事を提供する場所を創設し、今後の食の伝統を守り、発掘、開発する基礎となるのではないかと考えられる。

在も引き続き祭礼に着用しているもの、古い衣装は保存し、新しい衣装に切り替えているものなどがあります。新しく調達された衣装は、衣服の形態や文様構成は古い衣装を踏まえてはいますが、地布や刺繍糸の素材、装飾技法は簡素なものに代わっているのが現状です。

日常着は茶系統の無地布を主体とした地味な衣服であるのに対して、ハレの衣装である祭礼衣装は赤や青などのあざやかな色彩で、刺繍やアップリケなどの装飾技法により吉祥文様が華やかに彩られています。

伝統的な衣服は、その土地の気候風土や生活様式に適応し、身近で入手できる衣料資源が生かされ、民族特有の美意識や精神文化、技術水準を反映しています。これらの伝統文化は一度途絶えると再現の手立てがなく、特に衣服の場合は「もの」としての衣服の保存と同時に、被り物や履物等も合わせた「着装法」をもつぶさに調査し、生活文化の貴重な遺産として次世代に伝承する必要があります。

これらの伝統的な日常着、祭礼衣装はドンラム村の生活の歴史そのものであり、伝統的な服飾文化を適切に後世に継承するには、衣生活全般を有形無形の文化財として位置づけた、詳細な調査に基づく記録の作成と保存活動が急務であると思われます。

※図3～図6を参照

“ 東南アジアのリビング・ヘリテージとこれからの国際協力のあり方 ”

早稲田大学文学学術院非常勤講師

三浦恵子

近年、遺産概念がどのように変化し、それに伴った遺産保全のアプローチがどのように変わってきたか、リビング・ヘリテージとはどういう概念でその意義とは何かを東南アジアのいくつかの事例を基に議論しながら、これまでの国際協力の実態と問題点を明らかにし、これから遺産保全に国際協力がどうあるべきかを論じていきたい。

遺産概念の変化と遺産保全アプローチの変化

近年、世界規模の経済発展と民主化の過程に伴って、遺産概念への関心やユネスコを中心とした遺産保護の動きも活発になってきた。この動きは、1972年にユネスコが世界遺産条約を設立したことで加速化した。しかしながら、現実では、ヨーロッパ型の歴史的建造物や遺産保全中心主義が継続され、その理想とする遺産のあり方の固定化が主流になった。そういった動きの中で、遺産地域の公園化と観光化が進んでいった。それが、遺産に対する概念や対処の仕方が異なる東南アジアをはじめとするヨーロッパ以外の地域にも拡大され、遺産地域を保全の対象地とし、結果的に多くの遺産地域で、その内部や隣接地域に居住する住民を排除し、日常的な活動を規制し、それに代って遺産地域を専門家の活動と観光客の文化消費の場に変えていくことになった。それは、アンコール、ポロブドゥール、スコタイ、アユタヤ、ワット・プーとチャンパサックなど大文明発生の地や国家や社会の繁栄の象徴的な遺産地域で世界遺産に指定された所では顕著である。

リビング・ヘリテージの概念と意義

世界遺産プログラムと知名度の拡大により、地元社会にとっての遺産が一気に国家にとって貴重な政治文化的象徴、経済的消費物になり、地元社会が長年継承して様々な形で関わってきた遺産を無視したり、拒否したりすることで遺産の伝統的な価値やその維持可能性を損なうようになってきた。そうしたことから、これまで有形遺産の「生きている（無形）」要素の重要性を主張してきたにも関わらず、それが、現実的には遺産の主権国家によって無視または、軽視されてきた経緯から、ユネスコもパー

トナーのイクロム（文化財保存修復研究国際センター）やイコモス（国際記念物遺跡会議）も2000年以降、もっと具体的な形で「生きている遺産—リビング・ヘリテージ」についてセミナー、ワークショップ、会議などを開催するようになった。そこでは、リビング・ヘリテージとは何かというところから始まって、有形遺産を保全するだけではなく、遺産の持つ価値を総合的に護るためには、地域住民の信仰や伝統、生活を護りながら遺産を活かす方向にもって行かなければならないということが強調されるようになった。

東南アジアでは、2003年9月にイクロムとスパファ（東南アジアの文部省組織下にある美術考古のための地域センター）が共にバンコクでリビング・ヘリテージ・プログラムの第一回戦略会議を開催したのを皮切りに、2005年には、東南アジアの世界遺産地域で文化財保護の活動をしている組織の代表者を呼んで、5日間にわたる「リビング・ヘリテージ：共同体に権限付与」と題したセミナーをタイのフレー県で開催した。タイ・イコモスは、2007年11月にバンコクのチュラロンコン大学で「建造物から生きている遺産への解釈」という題名のシンポジウムを開催している。このタイを中心にしたリビング・ヘリテージの動きは、今や東南アジアのいくつかの遺産地域で好ましい結果を生み始めている。ここでは、地域住民主体のリビング・ヘリテージ研究・保護・活用を、タイ、シンガポール、インドネシアのバリ島の例をとり、議論したい。

国際協力の実態とこれからのありかた

リビング・ヘリテージに関する国際協力は、遺産の研究、修復・保全、現地専門家の養成、インフラ整備や関連施設の建設・修復、観光開発に特化される傾向にあり、遺産地の住民の問題に関しては、その国の政府に任せて関与しないというやり方が主流であった。国際協力の大きな問題は、協力が一国の中で包括的に行われず、経済開発、環境保全、インフラ整備、医療活動、遺跡修復、教育、人材育成などの支援が、単発的に行われる傾向にある。単独では成果を出しながら、全体的にみるとバランスを欠き、協力は、成果がわかりやすく、評価がしやすい分野へ偏っていることがわかる。それでも社会的弱

者が直接的に支援を得ている場合も多いが、意図せずに、プロジェクト対象国の政府関係者や、ビジネス・エリート の地位や利益を温存し、逆に社会的弱者をより周辺に 追いやることになってしまった場合も多い。開発途上国 の世界遺産地域では、いくつかの事例を除いては、遺産 管理が一般的に集合的、官僚主義的になってしまった。 ラオスのワット・プーの例を挙げると、日本政府が文化 無償で水利システムの再構築と遺物の保存庫を建設する ことを 2001 年に約束し、これが口実となって 2002 年 より 2003 年にかけてチャンパサックの郡政府関係者が 遺跡に隣接した部落の約 3 分の 1 を立ち退いてしまった のである。

アンコールでは、一方で、国際協力が推進され、遺跡 の保存・修復が進み、カンボジア政府や役人、ビジネス・ セクターによる不正や望ましくない動きに対してかなり

強い影響力を持ってきた。しかし、そのことへの偏った 関心が、他方で地元住民の境遇に対する考慮や配慮に欠 ける結果となった。近年、国際社会が地元住民の境遇に もっと配慮するようになり、状況は多少改善の方向に向 かっている。

このように、遺産をめぐる環境は、協力対象社会の政 治文化的状況によっても異なる。国際社会は、このこと を鑑みて、遺産を抱える社会を総合的に支援する体制を 整え、目指すところと矛盾しない結果をもたらすような 方法で協力関係を構築する必要がある。そのためには、 国家との約束だけでなく、地元住民参加型の遺産管理・ 開発プログラムを積極的に支援をすることが、これから のリビング・ヘリテージの維持可能性には望ましいと考 える。

■ 展示パネル一覧

<p>(中国) 世界遺産麗江古城の保存と観光開発 Conservation and Tourism Development of the World Heritage Site "the Lijiang Old Town"</p>	<p>清水 真一(東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター)、斎藤 英俊(筑波大学大学院人間総合科学研究科)、大和 智(筑波大学大学院人間総合科学研究科)、友田 博通(昭和女子大学国際文化研究所)、河原 洋子(筑波大学大学院人間総合科学研究科)、馬 紅(筑波大学大学院人間総合科学研究科)</p>
<p>(中国) 中国内モンゴルの都市 - 遊牧から定住への変容 - Nomadic Cities in Inner Mongolia -the Process to Settlement</p>	<p>包 慕萍/BAO Muping (東京大学生産技術研究所)</p>
<p>(カンボジア) 伝統文化の伝承 Transmission of Traditional Culture from the Elderly to Future Generations</p>	<p>上智大学アジア文化研究所</p>
<p>(ベトナム) ベトナム北部少数民族観光村・ザンモーにおける実態調査 Survey of <i>Gian-Mo</i>, A Tourism Village of Ethnic Minority in the Northern Vietnam</p>	<p>山田 幸正(首都大学東京都市環境学部)</p>
<p>(ベトナム) 食の保存・復元・再生 ～ドンラム村ミヤ寺における精進料理の再構築～ THE RECONSTRUCTION OF THE VEGETARIAN DIET OF MIA TEMPLE FOR THE DEVELOPMENT OF TOURISTS ATTRACTIVE VILLAGE - A STUDY ON THE FARM VILLAGE PRESERVATION OF DONG LAM VILLAGE -</p>	<p>向後 千里(ちさと舎)</p>
<p>(ベトナム) ベトナム伝統的衣服の染色 Study of Traditional Clothes in Duong Lam</p>	<p>下村 久美子(昭和女子大学生生活科学部)</p>
<p>(ベトナム) Hanoi's Ancient Quarter: The "36 Guild Streets"</p>	<p>福川 裕一(千葉大学工学部)</p>
<p>(フィジー) フィジー諸島共和国 旧首都レブカにおける文化遺産マネージメントと観光開発支援 The Project for Heritage Management and Tourism in Levuka, the Old Capital of Fiji</p>	<p>西山 徳明(九州大学大学院芸術工学府)</p>
<p>(ヨルダン) ヨルダン・ハシミテ王国/サルト市における文化遺産保護と観光振興支援事業 The Support Project for Heritage Management and Tourism Development in As Salt, Historic City in Jordan by JBIC</p>	<p>西山 徳明(九州大学大学院芸術工学府)</p>